

Jからの手紙

竹並 麻夕子

その家が目に入ったのは、海沿いの道に車を走らせている時だった。岬から少し離れた高台に、ぽつんと建っている家。二階建ての洋館に円筒形の建物がくっついていて、大きな窓がこちらに向いている。真紀子はちらりと、家に目をやった。——わたし、何だかあの家をよく知っているような気がする。ううん、そんなに知らないのかもしれないけれど、記憶の底にひっかかっている感じ。

ちよっと考えた後、彼女は左にウインカーを出し、海辺の町に入っていった。スーパーマーケットや喫茶店、パン屋、郵便局といったものが小さな区画に密集したメインストリートに入ると、そこはかとな懐かしさがこみ上げて来て、口もとがほころんだ。記憶はもうおぼろとはいえ、真紀子は小さい頃この町に住んでいたことがあるのだ。父親の仕事の関係で、ほんの少しの間。二年ほどしかないなかったかもしれない。

確か自分たちが住んでいたのは、町から少し離れた高台の住宅地だった。父親の勤めていた水産研究所から、供給されていた一戸建て。薔薇や向日葵の咲く庭を持つ、白い家だった。あれは、今でもあるのだろうか？

路肩に車を止めると、彼女はそばの郵便局に入っていった。眠そうな顔をした中年の女性局員がいて、入り口の方を所在なげに見ていた。

「すみません。ちょっと聞きたいんですけど」

真紀子が声をかけると、女性局員はゆっくりと彼女を見上げた。面倒臭そうに。

「なんででしょうか？」

「さっき、海岸線の道をドライブしてただけで、岬のそばに家が建っているのを見たの。洋館に塔のような建物がついている家。それは、どこにあるの？」

「黄色っぽい壁をした家ですよ？」

局員は聞き返した。

「そう、その家」

「それだったら、この前の道をまっすぐ進んで山の方に行って、右手に行けばすぐ見えますよ。そうですね、車で行けば十分もかからないんじゃないかな。言っておきますけど、今は誰も住んでいませんよ」

「どうも、ありがとう」

真紀子は礼を言うと、郵便局を出た。背中に局員の羨望のまなざしを感じて。真紀子のいかにも都会的な雰囲気は、小さな町では刺激的なのかもしれない。彼女は、自分の洒落た色あいのブラウスやグレーのスエードのスカートを意識して、女性局員の視線を楽しん

だ。

車に戻ると、ハンドルを握る前に腕時計に目を走らせる。午後一時半過ぎ。まだ、時間はたっぷりある。新しく住む場所を探しているのだ。じっくり時間をかければいい。夫がアメリカへ単身赴任している間、海辺で暮らしたくなり、毎夜地図を見るのが習慣になっていた。そこで目にしたR町。小さい頃を過ごした記憶のあるところ。それは、車を走らせて五、六時間もかかる遠い場所にあったが、懐かしい地名やゆるやかな海岸線を見ていたら、どうしてもそこへ行きたくてたまらなくなった。地図から海風が頬を撫でてくるような気さえした。そんな訳で、九月半ばの水曜日、真紀子はここにいる。三十五歳という年齢になってみれば、長時間のドライブはなかなか堪えたのだが。

「まあ、いいわ。ここまでやってきたんだもの」

郵便局で聞いた通り、車を走らせるとあつという間に、例の家の前に着いていた。遠くから見た時より、大分古い家のようなだ。鉄製の門は閉まっていたが、外の隙間から掛け金を外すとすぐ開いた。中には、雑草が生い茂っていたものの、誰かが定期的に刈るのか、それほどびびっているわけでもない。庭の片隅に立っているのは、蘇鉄と松。何だか変な組み合わせだ。朽ちかけた花壇がもう一方の端にあり、その向こうには海が見えた。

真紀子は、息を吸い込むと、扉に近づいていった。木製の扉の正面には、金色のライオンノッカーがついていた。扉の隣には、窓があり、白いカーテンでぴったり閉められている。窓に顔を寄せたが、カーテンの向こうは白い紗がかかっているようで、中の様子はわからなかった。無人の家が持つ静寂——それがひしひしと迫ってくるのに、真紀子はこの家には誰かがいて、自分を待っていてくれるような気がして仕方なかった。それに、この家はなかなか魅力的だ。まるで、オルゴールから流れる古い曲のような雰囲気がある。

その時、真紀子の目は、庭の一点に向けられた。門の近くに何か看板みたいなものが落ちていた。近づいてみると、そこには、「売家 連絡先は木村不動産へ」とあり、下には電話番号が記されていた。門扉にかけられていたのが、何かの拍子で地面に落ちたらしかった。しばらく、看板を眺めていた後、真紀子はバッグから携帯電話を取り出すと、不動産会社の番号を押しはじめた。

「はい。こちら、木村不動産」

電話に出た声は、中年男らしいがら声だった。

「すみません。今、岬そばの家に来てるんですが、看板を見たもので……」

「ああ、そうですね」

途端に、相手は愛想よくなった。

「なかなかいい家でしょう。少し、町や他の家と離れています。建物も格調高いし、海が見える眺めもいうことなしです」

「中を見せていただけける？」

「もちろんです。少し、お待ちいただければ、そちらへ伺います」

そう言うやいなや、真紀子の返事も聞かず男は電話を切った。カモを逃してはならない、とでもいうような慌てぶりだった。

不動産屋の男は、すぐやって来た。白いカラーラから降りた男は、電話の声から想像した通り、ちよっと汗臭く、濃い眼鼻立ちが暑苦しかった。

「失礼ですが、お名前は？」

男が、真紀子の方を向いた。

「小川真紀子です」

「ああ、それで、小川さん。このあたりに、家を買いたいと思ってらっしゃるんですか？」
「いえ。家を買う気はありません。ただ、海辺に住みたいと思って、借りる家を探してるんです」

「ここは、売家なんですがねえ」

そう言いながら、男はくすんだ色の鍵を取りだして、扉を開けた。その途端、黒い影が暗がりから飛び出してきたような気がして、真紀子とはつさに目をつぶった。だが、恐る恐る、再び目を開けると、そこは玄関ホールと廊下の広がる空間にすぎなかった。古い時間が封じこめられた匂いもする。

「じゃ、靴を脱いで、このスリッパに履き替えてください」

不動産屋は、手にしていた紙袋から、スリッパを取りだした。なかなか用意周到だ。真紀子はスリッパを履くと、彼の後に続いて家の中に入っていった。

廊下の奥には、天井の高い広い部屋があり、作りつけの本棚が壁に嵌め込まれている。男が窓に近づき、カーテンを開けると、群青色の海が視界いっぱい広がった。

「どうですか？ いい眺めでしょう？」

それは本当だった。

「ええ。この家は、どなたが住んでたの？」

「いや。持ち主は色々変わりましたが……今は、うちが利権を持っているという訳です」
男は、言葉をにごした。詳しいことは聞かれたくないらしい。

「たしかにいい家ね」

真紀子は、周囲を見まわした。天井からぶら下がっているのは、船室灯を思わせるガラスの照明で、海が目の前に横たわっていることとあわせて、まるで船に乗っているような気さえする。でも、と真紀子は思う。わたし、ここを知っている。ずっと以前、この場所に立っていたこともあるはず。でも、その時天井はもっと高く、壁紙の色はより鮮やかだった。

彼女は、浴室や二階の寝室も見たが、そのどれも気に入った。浴室には、淡いピンクのタイルが張られ、ステンドグラスの窓があった。そこから差しこむ陽光が、床を幻想的な赤や緑に染めあげている。寝室には、バルコニーもついており、そこから海が一望に見渡せる。家全体に、昔の貴婦人のような上品さが漂っていた。

「決めました。この家に住みます。ただし、借りるだけという条件で」

真紀子は男の方に向き直った。

「ああ、そうですね。じゃあ、それでかまいません。お客さんはお目が高いですよ。今どき、これだけの建物はありませんからねえ」

書類を出しながら、彼は続けた。

「ところで、小川さんの御家族は？」

「夫がいますけど、今海外にいますからわたし一人でここに住みます」

「へえ」

男は、呆れたように、真紀子を見やった。金持ちの考えることはわからん、とその顔にはつきり書いてある。

「何かお仕事をお持ちですか？」

「英語の翻訳をしています。まだ、何冊か訳しただけなんですけど」

「それは、大変なお仕事で……」

言い淀む男にかまわず、さっさとペンを走らせる。住所、名前。年齢は三十五歳、と。書き終わった書類を男に渡しながら、真紀子はゆっくり部屋を見まわす。これから、ここがわたしの城。窓の近くに机を置いて、パソコンで作業しよう。毎日、海から風が吹きぬけ、カーテンを優しく揺らせるはずだ。潮の遠鳴りが耳を震わせ、わたしの中に眠る海をも目ざめさせてくれるだろう。

「それで、もう決めてしまったわけかい？」

電話の向こうで、溜息が聞こえた。

「どうして、引越す必要があるんだ？ 今の家で暮らせばいいじゃないか」

夫——慎一郎の感じている苛立ちが、太平洋の向こうからダイレクトに伝わってくる。カリフォルニアの空は天国みたいだったな、と関係のないことを思いながら真紀子は言った。

「もちろん、この家はそのままにしておくつもりよ。ただ、しばらく別の土地で暮らしてみたいの。あなたが日本に帰ってくるまで、まだ数年はあるんでしょ？ その間、わたしのやりたいようにやらせてちょうだい」

「君は、昔から言い出したら聞かないからな」

「そうよ」

「OK。仕方ない。僕が反対したって、もう決めてしまったんだから。君の好きなようにしろよ」

「ありがとう」

受話器を戻す時、しんとした淋しさが指先に伝わってきたような気がして、真紀子ははっとした。これは、わたしの淋しさかしら？ それとも夫の？ 瞬間、彼女は夫が手の届かない遙かな場所に去ってしまったような気がする。トンブクスウとか、ギアナ高地とかそんなところへ。でも、そんなはずはない。彼は、ロサンゼルスのアパートにいるはずだ。あちらは、夜。缶ビールでも飲みながら、冷たいベッドに腰かけているかもしれない——。真紀子は、慎一郎の孤独な背中を想像する。

どうして、アメリカについていけないのか？ と何人もの人に聞かれた。あなたがいな

いと、慎一郎さんが困るじゃない。慣れない異国で仕事しなけりやならないのに、サポートしてあげたら？ でも、真紀子は慎一郎との間で、一つの季節が終わってしまったのを知っていた。いつの間にか、ひんやりした秋風が肌にふれ、透明な日ざしが互いの顔を照らす中、二人は相手に遠い他人を感じるのだった。

それでも、明け方傍らに、夫の気配を感じることもある。霧に包まれた林の中で、彼は枯葉を踏みしだきながら、こちらに近づいてくる。ゆらりと伸びた長身は輪郭がぼやけて、まるで幽霊みたいだ。その哀しみに満ちた雰囲気、思わず胸を突かれ、真紀子は目を覚ます。そして、しばらく呆然として自分を抱きしめる。まるで、悲しい夢を見たあとみたいに。でも、意識の片隅で、何かが囁いている。あれは、夫ではない、と。

真紀子は考えを振り払うように、リビングルームのソファから立ち上がると、寝室に入ってしまった。早いところ、荷物をまとめてしまおう。サイズの合わない洋服や罫の入った紅茶茶碗にはきっぱり別れを告げるのだ。

岬の家で最初の夜を過ごしたあと、真紀子は午前八時半頃目ざめた。寝室に決めた二階には、弓形に張りだしたバルコニーがあって、そこからペルシアブルーの海が広がっていた。ザーツ、ザーツ、波が打ち寄せる音が絶え間なく、耳の底で鳴っていて、横たわっているベッドのシーツが冷たい海水のような気さえする。ずっと昔、小さな子供だった時も、こんなに海を近く感じていただろうか？ 真紀子には思いだせなかった。

階下に降り、ロールパンを温め、紙パックの紅茶を淹れ、簡単な朝食を済ませたあと、彼女は何気なく玄関ドアに近寄った。そして、ドアを開けたが、その時横の郵便ポストに目がとまった。それは、緑に塗られた鉄製の四角い箱型で、真ん中には、百合の花が金色で浮き彫りされた瀟洒なものだった。だが、その入り口から何か白いものが覗いている。

思わず、手を伸ばして取り出した後、真紀子はそれが手紙であるのに気づく。宛先には何も書かれていず、裏面にインクで小さく「J」とだけ記されている。

——何だろうか？

誰にあてたものだろう。前の住人だろうか？ でも、封筒の白さは、怖いくらい鮮やかで、Jの文字のブルーも今書かれたばかりのように瑞々しい。

好奇心が膨れ上がるのを感じて、真紀子はその手紙を部屋に持って入った。キッチンの椅子に座ると、ハサミで封を開く。中から、現れた紙には、こんなことが書かれてあった。

「親愛なる真紀子へ

君はとうとう、この家にやってきてくれたね。最後に君と別れてから、長い時間がたった。その間、僕はどんなに淋しかったろう。だが、もうすぐ君に会える。古い岬の家でね。

「 J

真紀子は呆気にとられて、しばらく手紙から目が離せないでいた。一体、これはどうい

うことだろう？ 誰かのいたずらだろうか？ でも、なぜわたしの名前やここに越してきたことを知っているのか。

よく見ると、それはクリーム色のコットン地と思われる上等な紙に書かれていた。外国製なのかもしれない。封筒には、さっきも見た通り、切手さえ貼られていなかった。

「何だか気持ち悪いわね」

彼女はつぶやくと、手紙をテーブルの上に放りだした。この誰とも知れぬ者から送られた手紙には、毒でも塗ってあるんじゃないか——そんな妄想まで湧いてきて、あわてて洗面所で手を洗う。

荷物は、ダンボールに詰め込まれたままになっていた。ベッドやテーブル、食器棚といった家具は、引越し会社の作業員が動かしてくれたのだが、細かいものはほとんど手をつけていない。ずっと暮らして来た西の大都会から、車を走らせ続けて、夕方この家に辿り着いた時は疲れ果ててしまった。それで、シャワーだけ浴び、ベッドに入るとあっという間に眠りがやって来たのだ。

食器をしまい、本を並べ、飾り物を置いたりしているうちに、日は高くなっていた。ふと時計を見ると、十二時近い。

——町へ降りて、お昼でも食べよう。

真紀子は、小さなバッグだけ持って、出かけることにした。門を出、後ろを振り返ると、イエローオーカー色の洋館と、庭は金色の陽光の中で生き生きと見えた。まるで、長い眠りから覚めたかのように。

町のメインストリートに面して、昔の西部劇に出てくるような回転扉のついた喫茶店があった。「ゴールドラッシュ」という店名が書かれた木の看板が、入り口に吊り下げられている。近くのコインパーキングに車をとめた後、真紀子はそこに入っていった。ランタンみたいな照明がポツンとついた店内は薄暗く、煙草の匂いがしつこい追跡者のようからみついてくる。

客はまばらだったが、彼女は思い切ってカウンターの椅子に腰かけた。カウンターの中にいるのは、年齢不詳の男だったが、きちんと撫でつけた髪と清潔なエプロンをつけ、店のイメージには不似合いに思われた。

「何にします？ お客さん」

マスターの男が寄こしたメニューに、ちらりと目をやって真紀子はカレーライスとコーヒーを頼むことにした。どんなところへ行っても、食べられないほどまずいカレーを出すことはない。

「お客さん、旅行者の方ですか？」

「そう見える？」

「違うんですか」

マスターは、コーヒーをドリップする準備を進めながら、彼女の方を見た。

「つい昨日、こちらに引越してきたの」

「それは、それは。これから、お見知り置きいただきたいですね。それで、どちらの場所

に？」

一瞬考えて、引越してきた家の場所を聞いているのだとわかった。

「岬のそばにある古い家よ」

「……あの家ですか」

マスターはそう言ったきり、しばらく黙ったがやがて続けた。

「あそこは高台の住宅地から、少し離れてぼつんと建っているでしょう？ どうしてわざわざお選びになったんです？」

「はじめて見た時、とても懐かしい気がしたの。でも、それも当たり前かもしれないわね。わたし、小さい頃この町に住んでいたことがあるから」

「それはいつごろのことですか？」

「五、六歳だったから、いまから三十年ほども前のことよ」

「そうですか……。こんなこと言っているのかわかりませんが、岬の家にはとやかくの噂があるんですよ」

「えっ？」

「建ったのは、大分昔のことらしいですが、最初住んでいた青年は行方不明になったと言われています。その次に住んだのは一人暮らしの老婦人でしたが、眠ったまま死んでいるのが発見されました。それから、幾人もの人がやってきましたが、『この家に住んでいると、悪い夢を見たり、体調がすぐれなくなる』と皆同じことを言い、去っていきました」

「まるで、イギリスあたりで聞く幽霊屋敷の話みたいね」

真紀子は眉をしかめた。このマスターは、何だっってこんなことを言うのだろうか？ ひよっとして、よそ者を追い出そうとでもいう悪意があるのだろうか。

「不動産屋もはっきり教えてくれなかったんだけど、あの家は誰が持っていたの？」

「だから、その行方不明になった青年の家だったらしいですよ。でも、それも五十年以上前のことらしいですね。何度か、持ち主は変わったらしいですが、さきほど言ったようなことから、最後には空き家になった訳です」

「そう」

何と言っているのかわからなかった。

「できましたよ」

マスターは、カレーライスの皿を置いた。スパイスの香りが鼻にふわりと漂い、続いて口に運んだカレーの味も驚くほど本格的だった。

「おいしいわ」

「コーヒーの味も試していただきたいですね。この店の自慢なんです」

その言葉通り、コーヒーも素晴らしかった。夜のように黒い液体が、ビロードの舌触りを残して、喉の奥に消えていった。

「この分じゃ、わたしが越してきたことも噂になりそうね。あの家に誰か来たって」

真紀子が言うと、彼は困ったように微笑んだ。

「すみません、つまらないことを言ってしまった。忘れて下さい」

「大丈夫よ。気にしてないから。わたし、ここに住んで、何をしようか考えてわくわくしてるの」

「お客さんみたいな人が、こんな田舎へ来たことが不思議ですよ」
マスターは、笑った。

「ゴールドラッシュ」を出ると、真紀子は高台の住宅地を目指した。子供の頃、住んでいた家が見てみたかった。

メインストリートから伸びた道が、街路樹のある広い坂道になり、その横にこじんまりした家々が並んでいた。潮の匂いのする風が、家の窓や木々を洗っていく。まるで、波が海辺の砂をひたしてゆくように。

——確か、小さな公園があって、その上の坂道にあったはず。

うる覚えの記憶を頼りに、真紀子は道をたどっていったが、案外簡単に家はみつかった。白い壁には、罅割れや染みもある一軒家。でも、庭はきれいにしており、コスモスが幾つも揺れている。これから、薄紫の花が咲いたら、灯がともったようになるに違いない。

彼女は、しばらくぼんやりと家を眺めていた。昔は、もっと、明るく楽しい感じの家だったのに。

突然、家のドアが開き、女性が出てきた。

「どちらさまでしょうか？」

近づいてきた女性は、不思議そうに真紀子を見た。

「すみません。わたし、ちいさい頃、この家に住んでたんです。もう三十年ほど前の話ですけど……」

「じゃあ、真紀ちゃん？ そうなのね？」

女性は、大きく目を見開き、興奮したように真紀子の腕をつかんできた。なぜ、わたしのことを知っているんだろう？ 真紀子は女性の顔をまじまじと見つめた。リスのようにはしこい感じのする目や表情豊かな大きな口……記憶の中で知っている顔と目の前の顔が結びついた。

「ひょっとして、美里ちゃん？」

「そうよ。やっぱり、真紀ちゃんだね。どうして、ここにいるの？」

それは、わたしの言いたいことだわ、と思いながら真紀子は言った。

「わたし、この町に越して来たの。ずっと、住む訳じゃないんだけど。美里ちゃんこそ、どうしてこの家にいるの？」

「私たち家族の住んでいた家は、海岸近くにあったでしょ？ ずっと前の話だけど、海岸あたりが津波に吞まれてしまったことがあって、我が家も流されてしまったのよ。それで、こっちに移って来たんだけど、ちょうど真紀ちゃんたちの住んでいた家が空いていたわけ」
「そうだったんだ」

「でも、本当に凄いことだよ。何十年も前の幼馴染に再会するなんて。時間ある？ だったら、上がって」

美里は、真紀子の手をひっぱって、家に連れていった。

家の中は記憶通り、玄関から続く細い廊下の向こうにキッチンがあった。キッチンの中には、パイン材のテーブルと椅子が置いてあり、二人はそこに腰かける。そばの食器棚には、不揃いの器がごたごた積み重ねられ、新聞やチラシが床に置かれたままだ。清潔好きだった、真紀子の母親が切り盛りしていた頃と比べて、同じ家とは思えなかった。

「でも、真紀ちゃん、相変わらず綺麗だね」

美里は、紅茶の入ったティーカップを差しだしながら言った。

「小さい頃、真紀ちゃんたち一家がやってきた時、すぐくびっくりしたものだ。何て垢ぬけてるんだらうって。この家も今とは違って、童話の世界に出てくるみたいな素敵な感じだったよね」

「そう？」

「真紀ちゃんも、いつも可愛い服着てたの覚えてる。紺色のワンピースにチロリアンテープで縁取りしたやつとか。私なんかダサイ格好ばかりさせられていたから、羨ましくて仕方なかったなあ」

美里ちゃんは、たしかわたしより一つか二つ年上だったはず。毎日のように家に遊びに来てくれたものだ。真紀子の頭の中に、今朝の手紙が浮かんだ。Jという文字——それは誰のことだろうか？ 美里は知っているだろうか？ だが結局口にはしなかった。

翌朝、起きた時、真紀子の行動は迷いがなかった。猟犬のような勢いでベッドから飛び出し、玄関のドアを開けてみる。朝日の中で光る緑色のポスト。そして、クリーム色の封筒が昨日と同じように入っていた。一瞬息を飲んだあと、彼女は手紙を開いた。

「一刻も早く、そちらへ行きたいと思っているんだが、なかなかそういう訳にいかない。でも、少しずつ君に近づいてるよ。僕の影が感じられるかい？」

J
L

真紀子はしばらく呆然と手紙を見つめていた。昨日帰って来た時、ポストには何も入っていなかったはずだ。夕暮れのオレンジ色の光を浴びて、ポストの口は静まりかえっていた。

誰が、いつ入れていったのだろうか？ 真紀子の頭のスクリーンに、冷たい星の光が降る真夜中、この家に近づく影が描きだされた。その人物は音もなく、ドアに忍び寄り、手紙をすべり込ませていく。

だが、もう一つ重大な事実に気がつき、真紀子は愕然とした。このJという人物は、遠く離れた所にいるかのような書き方をしている。この家まで、なかなか来られない、というように。

よく見ると手紙の文字はある部分が欠けたり、かすれている所もあった。最初はワープロで打ったものと思っていたのだが、そうした活字にありがちな平板さがなかった。

——これ、タイプライターだわ。

真紀子は、確信した。外国の作家が書いたタイプライター原稿を、どこかで見た記憶もある。でも、今どきタイプライターなんて使う人がいるのだろうか。

その日一日、真紀子は二階の部屋でぼんやり過ごした。窓から差しこむ光は太陽が傾いていくとともに、優しい金色を帯び、やがて星がきらめいた。

手紙はそれから毎日届いた。姿のない配達者は、ひそやかにやって来て、ポストに滑り込ませていくのだった。

「僕の方から手紙を寄こすばかりで、君の声が感じられないのは淋しい。だが、冷たい水の中にいるよりはましだね」

「ふと思ったんだが、君は僕の事を覚えていないかもしれない。だとしたら、夏の日のパーティーを思いだしてくれたまえ」

これらの手紙（とも言えない短いメッセージだったが）は、真紀子をパニック寸前にしてしまった。一体、誰がこんなものを寄こすのだろうか？ 背後から黒い影が少しずつ近づいてきて、そいつの息が首筋にふきかけられるような、気持ち悪さ。

真紀子は、二階のバルコニーのある部屋で眠っていたが、ベッドの上の窓からは、玄関のポーチと庭を見渡すことができた。彼女は真夜中、カーテンの影から息を殺したまま、玄関の前を見つめた。十月の夜、風が木々の梢をざわざわと揺らしている。道には、街路灯が灯っていて、その青白い光が植物を病的に照らしだしていた。何も、誰もいない。でも、得体のしれないものがうずくまっていると思うのは、気のせいだろうか。例えば、そう、蘇鉄の葉の陰とかに。

——ここには、誰もいないんだわ。

美里たちの住む住宅地は、ここから歩いて七、八分ばかりもある。真紀子は今更のように、自分が一人ぼっちであるのを感じた。ここで、誰かがやってきて、悲鳴をあげたとしても、助けに来る者はないだろう。

真紀子は、ベッドから飛び下りると、バルコニーそばに駆け付けた。そこに置いてある机の上には、電話があった。彼女は、ロサンゼルス番号を押し、受話器に耳を押し付けたが、聞こえてくるのは、単調な呼び出し音だけだった。

——ああ、向こうは昼なのね。

慎一郎は、まだオフィスで働いているはずだ。彼女は溜息をつき、のろのろと受話器を戻した。鳴り続ける呼び出し音に混じって、太平洋の波の音が聞こえてくるような気さえる。慎一郎と自分を隔てる、遠さをあらわすかのよう。

真紀子は、机に向かっている。パソコンとその横に並べられた、英語辞典や動物図鑑。彼女は、野生動物の生態を書いた記事を和訳しているところだった。動物愛護協会から頼まれた仕事で、今週末までには仕上げなければならない。

だが、彼女は頭の片隅で別の事を考えていた。Jという人物は、わたしが自分の事を忘

れているのではないか、と言っていた。もし、そうなら夏のパーティーを思いだして欲しい、と。パーティーだなんて、一体何の事だろう？ それはどこであったのだろうか？ 不意に輝く青い芝生と、星条旗の赤や青が浮かんできた。

——何か、思い出せそうなんだけど。

けれど、記憶の扉は、それ以上開こうとしなかった。細い光線が、隙間から洩れでできただけのような頼りなさだった。

「それに、変な事も書いてたわね。冷たい水の中にいるとか……」

何かの例えだろうか？

その時、風がさあつ、と大きく吹きこんで、潮の匂いが部屋に満ちた。真紀子は、開け放たれた窓から海を見る。秋の太陽は、無数の黄金の矢を放ち、海面はハレーションを起したかのように光り輝いていた。でも、陽が陰ると、グレーがかった青い波が姿を見せる。冷たい深淵が下に横たわっていることを暗示する、その青。

そう思った途端、真紀子ははっとした。じゃあ、Jが言っているのは、海の中ということだろうか。

海から何ものかが上がってきて、ここまでやってくる。ポタポタとしたたる海水や、海草が、そのあとにずっと続いている。まるで、ナメクジが這った後に、粘液が残されているみたいに——。思わず、真紀子は叫びだしそうになった。バルコニーの窓を急いで閉め、レースのカーテンも引く。部屋は、水底のように、ほの暗くなった。彼女は、息をこらしながら、カーテンの陰に立っていたが、突然チャイムが動物の悲鳴のように鳴り響いた。それは、午後の空気を震わせながらいつまでも続いた。

真紀子は、インタフォンのボタンを押した。

「どちらさまですか？」

「あつ、真紀ちゃん。私、美里よ」

救われたような気がして、彼女は急いで玄関に駆けつけた。外のポーチに立っている美里は、大きな紙袋を片手に抱え、屈託なげに笑っていた。

「本当に、この家に越してきたんだね。私、この岬の方に来ることはほとんどないんだけど」

部屋に入ってきた美里は、興味ありげに壁に掛けた絵や、陶器の置物に目をやった。真紀子は、丁寧に紅茶を淹れ、缶からクッキーを取り出す。それを持って客間に戻り、テーブルの上に置いた。

「せっかく来てくれたんだから、お茶でも飲んで。あり合わせのものしかないんだけど」

本当は、紅茶はフランス製の高級なものだったし、クッキーもココア地とプレーンな地が市松模様になった、気に入りのパティスリーのものだった。

「わあ、気を使ってくれなくてもいいのに。実はね、自家菜園で作っている野菜を持ってきてあげただけど、それは口実で、また真紀ちゃんに会いたかったの」

「野菜なんて、うれしいわ」

真紀子は、美里の持ってきた野菜をまじまじと見た。かぼちゃはハロウィーンの飾りに

そのまま使えそうなほど大きく、人参はオレンジ色の温かな光に包まれているみたいだ。

「ねえ」

思い切って、美里に顔を向けた。

「わたしがここにいた時、パーティーなんてあった？ そんなものがあつたなんて思えないんだけど」

こんな海辺の小さな田舎で、パーティーだなんて馬鹿げてる。さすがにそう言うのは、遠慮したのだが、驚くことに美里はこう言つてのけた。

「パーティー？ あつ、覚えてる。真紀ちゃんが6歳になった時、同級生や町の子たちを呼んで誕生パーティーしたじゃない。真紀ちゃんちの庭で、大きなテーブルの上にごちそうを並べて。サンドイッチだとか、フライドチキンだとか、菓子パンとか……今思うと、真紀ちゃんのお母さん、よくよその子供たちのために頑張ってくれたと思うわ」

いやだ、と真紀子は思った。当時、研究所の所長として赴任した海洋学者の父親と真紀子たちは、ちょっとしたスターみたいな扱いだつたらしい。だが、そう思った瞬間目の前に、さあつと青空や子供たちの歓声が広がって、真紀子の記憶の扉には鍵がカチリと音をたてた。

そうだ。あの星条旗は、盛んに打ち鳴らされたクラッカーだ。小さな三角堆のクラッカーは、紙吹雪を飛ばせたあと、幾つも幾つも芝生の上に捨てられた。子供たちはケーキを食べ終わった後、ゲームや鬼ごっこをし始めた。小さな真紀子はすっかり退屈してしまつて、庭から木戸を通つて、こっそり外へ出ようとした。

そこに、あの男はいたのだ。すらりと背が高く、夏だというのになぜか黒っぽい背広を着ていた。溢れる陽光の中で、その顔ははっきりと見えない。逆光にさらされているかのように、薄暗い影に覆われていた。それなのに、真紀子には彼がまだ若い青年だということがわかった。

彼——Jは言った。

「君は逃げだそうとしてるんだね」

真紀子は何と言つていいかわからず、ただ頷いた。

Jは低い笑い声を洩らした。

「そうか。じゃあ、僕についてきたまえ」

彼女は、彼の後に続いた。強力な磁石に惹きつけられるみたいに。この青年からは催眠術的な魔力が放射されていて、嫌でもじりじり寄つていかざるを得ないという感じだった。そして、連れてこられたのが、この家。青年は、広々とした部屋の椅子に座り、真紀子を見つめた。室内は暗いというわけではないのに、彼の顔ははっきり見えなかったような気がするし、今も思いだせない。Jと何を話したかも。

それでも、彼と会い続けたのは覚えている。二階の部屋の窓から木戸の外の木蔭にJが立っているのを見ると、こっそり庭に出て行った。本当は怖くてたまらないのに、Jには逆らえないような気がするのだ。早く家の方に帰ろう、とそわそわしながら、目の前の青年がどこかはるかな場所に自分を連れ去ってくれるのを夢見るような、甘美な恐怖があつ

た。青白い冷光が照らす、月世界のような場所に――。

しばらくして、真紀子の父親は大学で教えることになり、一家はR町を去ることになった。真紀子は、ほっとして安堵のあまり泣き出しそうになった。

それから……R町の事もJの事もいつしか、記憶の函深くしまいこまれたままになっていて思い出すこともできなくなっていた。

「ねえ、真紀ちゃん」

話しかけられているのに気づき、真紀子ははっと顔をあげた。すっかり、美里がいるのを忘れていた。

「何だかぼんやりしてたわね。……それはそうと、一人で暮らしてるって言ってたけど、ここ怖くない？」

美里が声を落とした。飲みかけの紅茶茶碗を皿に戻しながら、周囲の壁を見まわしている。

「何かあっても、離れた場所に立っているし。そりゃあ、エレガントという言葉がぴったりの素敵な家だけど。子供の頃は円い塔の中はどうなってるんだろうと思ったこともあるわ」

「円形の部屋が一階と二階に一つずつあるの。その外側に螺旋階段があるわけ。まるで、灯台のような感じね」

「へえ、凄い」

真紀子はふと不思議に思った。

「美里ちゃん、この家来たことないの？」

「もちろん。ここは、ほとんどの場合空き家だったわ。昔真紀ちゃんがいた頃、一緒にこの家にしのびこもうとしたんだけど、鍵がすっかりかかっていて、無理だったじゃない」「えっ？」

では、あの時も空き家だったのだろうか。なら、なぜJは、ここにいたのだろうか？

真紀子はふらりと目まいを感じた。わたしの周りで、とてつもないことが起こってる。知らぬ間に届けられる手紙……あれだって、夜の間、黒い鳥が嘴にくわえて空から運んでくるのかもしれない。

「じゃあ、私はそろそろ帰らなきゃ。言うの忘れてたけど、私、生協の事務所で働いてるの。夕食は母が作っていてくれるから楽なんだけど」

そう言って、美里は立ち上がった。彼女がまだ独身のままだという事は、この間会った時に聞いている。

パンプスを履き、笑顔で手を振る美里の姿がドアの向こうに消えようとする時、真紀子は大声を出して、その腕をひきとめたくなくなった。

――待って。わたしを置いていかないで。わたし、ここに一人でいたくない。だが、喉が錆ついたように、声は出なかった。

「またね。真紀ちゃん、今度の週末にでも、うちに来て」

美里は出て行き、やがて門の掛け金がギイと戻される音がかすかに聞こえた。

夕暮れの光が庭に舞い降りていて、植物やポーチの柱を砂糖菓子のように優しく縁取っている。門の外の道にいる白い鳥はカモメが迷い込んできたらしい。真紀子の外の世界はいつもと同じように美しく、ゆるぎなく見えた。

翌朝、届けられた手紙には、こうあった。

「愛する真紀子へ

君はようやく僕のことを思いだしてくれたらしいね。うれしいよ。今の僕には、岬家の灯りもはつきり見ることができると」

その翌朝——それは、最後通告だった。

「今夜、君を迎えに行くよ。やっと、君に会えるかと思うと、胸が高鳴る。僕がどんなに君に会いたがってたか、想像できるかい？」

真紀子は手紙を読むや、小さな叫び声を発して仕事机に駆け付けた。その引きだしをいっばいに開く。その中には、Jから送られてきた手紙が全部入っていた。クリーム色の美しい封筒と青いインクのJの文字……彼がついにやってくるんだ。わたしをつかまえるために。真紀子は封筒の束をつかんだまま、ぐるぐる室内を歩き回った。どうしよう、逃げださなきゃ。

彼女は、国際電話をかけた。

「はい、小川です」

「あっ、わたし、真紀子。変な手紙が毎日、わたしの所に届いているの。今晚、わたしを連れていくんだって」

「一体、何を言っているんだ？ そんなに興奮してないで、順序だてて話してくれよ」

真紀子はつつかえながら、ここに越して来た日から今までのことを話して聞かせた。だが、Jに子供時代に会ったことは触れなかった。

「そりゃあ、異常者の仕業だな。大体、君が勝手なことをするから、そんな事になるんだ」

慎一郎は溜息をつきながら、続けた。

「僕に助けを求めてこられても、どうしようもない。こちらは、ロスにいるんだから。その家から逃げ出すか、友達に相談するんだな。警察に保護を求めてもいい」

彼はいつものように冷静だった。

「わかったわ」

真紀子は、電話を切った。夫に話したせいとか、少し落ち着いてきた気がする。

彼女は、手紙の束を手にしたまま家を出ると、港町の方に歩いていった。警察署というほど立派なものではないにせよ、確か駐在所があったはず。カモメの舞う海岸ぞいに、その駐在所があった。

だが、中に入ろうとした真紀子は小さな机や、退屈そうな表情で海を見ている警官の姿を見て、足が進まなくなってしまった。こんな眠ったような、のどかな場所で怪奇な手紙なんて馬鹿げてる。警官は、まともに相手などしてくれないだろう。

それに、と思う。わたしはJを恐れてる訳じゃない。子供の時は怖かったけれど、一種の魅力も感じていたのだ。彼が今晩来るといふなら、対決したっていい。

真紀子は、岬の家に戻った。息を潜めたまま、時がたつのをじっと待つ。窓の向こうの海に日が沈み、いつとき辺りを葡萄酒色に染めた後、夜が近づいてきた。潮が満ちてくるように。

部屋に橙色の照明が灯った時、不思議な静けさが漂っていた。夜の中で、何か凍りついている。——そして、それは鳴った。玄関のベルが、規則正しく三度。

だが、それとほとんど同時に電話も鳴っていた。真紀子はちらと、頭をめぐらし先に受話器を取った。

「真紀子か？」

慎一郎だった。

「君のことが心配で、まだオフィスにいるんだが、電話をかけてる。例の件はどうなったんだ？」

「今、彼が来ているの。そこで聞いてて。わたし、逃げたりしないで立ちむかうことにしたから」

「何だって？ 君は一人で家にいるのかい？ 馬鹿な事はよすんだ」

夫の声をよそに、彼女は受話器を放りだしたままドアに近づいていった。深く息を吸った後、さっと、ドアを開けた。

そこには——誰もいなかった。冷たい風が吹き、門の外の街路灯が道や木々を青白く照らしている。木の葉がかさこそと音を立てる外、淋しい秋の夜が広がっているばかりだった。

しかし、彼女は何かが顔に触れるのを感じた。濡れた手と甘い海水のような匂い——。部屋の中では、外されたままの受話器から必死の呼びかけが続けられていた。

「真紀子、真紀子！ 一体、どうしたんだ？」

その夜、高台の一軒家から一人の女性が不思議なものを見た。彼女は生協に勤め、母親と二人暮らしの独身女性だったが、夜中ふと目が覚めた時、窓の向こうの坂道を一人の青年と小さな女の子が歩いているのに気づいた。彼らは、離れるまいというように、しっかりと手をつないでいた。月光が、その姿を神秘的に照らしだしていて、まるで夢を見ているような情景だった、と後で女性は思う。

海辺の砂には、二つの足跡が長く続いてしたが、やがてそれはあとかたもなく消えて行った。